

全体像把握へ向かって 試訳完了

——ヘンリー・ヴォーン小考（十三）——

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火
花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) 全篇のうち、
第一部七三篇の作品は本誌前号で全て拙訳が「まず終了し
た。あとは第二部五六篇のうち十篇が残っている。本号で
はその十篇を出現順にみてゆくことにしよう。

まず、第二部が始まってから十二番目の作品が、「花冠」
〔小考（七）〕の次に現れる。第二部は、表題をざっと眺め
れば、キリストの「昇天日」、「昇天讃歌」に始まり、段落
記号だけの無表題作（記七 彼らは皆光の…）、「白日曜
日」、「申し出」、「鶏鳴」、「星」、「棕櫚の木」、「歓喜」、「恩
恵」、そして、「花冠」となる。「恋煩いの」以後は、「三
位一体主日」、「詩篇一〇四」、「鳥」、「森」と続く。

恋煩いの Love-sick⁽¹⁾

イエス様、我が生命！⁽¹⁾ どうすればいいのでしょうか 御身を
本当に愛するには？

おお御身の〈霊〉が私を強く感動させ

恩寵を遙かに及ぼして下さればいいのだが

人間が全く純粹に星を愛し肉付けする⁽²⁾ようになるほど！

星は決して沈まず、いつまでも昇っていて

それで昇っては走るのだ、この空という空を走り尽す程に

これら狭くて（私には狭い）閉ざす空を、

それで私は閉ざされるので やはり闘うのだ、

こういう空と絶えず闘っている。おお いらっして引き裂いて下さい

さもなければ大空を撓ませて下さい！〈主〉よ撓ませて降りてきて下さい

そして御身の目の前でこの山々を流出させて下さい、

この私の中の冷たい〈氷〉の山々を！ 御身は火を

精錬なさるので、おからだ精錬して下さい私の心を、

私の汚れた汚れた心を！ 御身は不滅の熱です

動きが与える熱なのです、だからそれを温めて下さい 鼓動するまで

動するまで

そうです御身のために鼓動させて下さい、御身が哀れんで

聞いて下さるまで

そうです御身が開かざるを得なくなるまで聞いて下さい

罪深い哀れな者に開いて下さい、御身の悲嘆をもたらした

哀れな〈者〉に、

御身の悲嘆、それが彼の安寧をもたらしたのです それ程

までに彼の安寧を

御身が御自身のを忘れてまで、何故なら御身は封印なさつ

たからです

私のを御身の血で、御自身の血で御身は私のものになさる

のです、

私のものにいつまでも、いつまでも、そして私をいつまでも御身のものに。 [M・四九三]

訳注

(1) この詩の詩句の繋ぎ方の技巧については「花輪」〔小考

(七) 30〕九行目以降、及びG・ハーバート「花輪」〔二二行の詩、WIL・六四四―四六〕参照「M・七四八」。

(2) to make... flesh a star 星は純粹で不変であり、死後善人の魂は星に住むのだという伝説に言及「RA・六〇五」。

(3) descend 再来する「同右」。

(4) Thou art/Refining fire 「バラキ書」3・2「彼の来る日に誰が身を支えうるか、彼の現れる時誰が耐えうるか、彼は精錬する者の火であり…」〔同右〕。

(5) Heat motion gives 「熱は、最も作用を及ぼし得る、動かすのに最も貫ける、動ける、効力のある一〈要素〉で、光線の動きから生ずる」(Batum, Upon Bartholome... de Prop. rerum [1582]) 「同右」。

(6) So hear that thou must open 「マタイによる福音書」7・7「叩け、しからは開かれん」〔同右〕。

この詩の詩句の繋ぎ方の技巧とは一読明瞭にも、同語反

復の多さである。星、昇る、走る、空、狭い、閉ざす、闘う、撓ませる、山々、精錬する、心、汚れた、熱、鼓動する、聞く、開く、哀れな者、悲嘆、安寧、血、私のもの、いつまでも、で原語を記せば、star, rise, run, skies, narrow, barre, warre, bow, mountains, refine, heart, foul, heat, beat, hear, open, wretch, woe, weal, blood, mine, ever の二二語が二二行の作品に二度ずつ（最後の「いつまでも」は三回）反復されて、恋の病を煩っている有様が示されるのである。一、二、一〇行目が一一音節の他は全て一〇音節詩行。一一、一六行目の二行は別の韻であるがそれ以外は A A B B … と対で押韻する二行連句から成る。

自分の生命であるイエスを本当に愛するにはどうすればいいのか、と語り始めるこの詩の「私」には、要するに「我が生命」であらせたいイエスを本当には愛せないし、イエスの〈霊〉に強く感動できず、恩寵を及ぼされているとも感じられないのである。自分がいつまでも救世主イエスのものであると思えば安寧を得られそうだからそうありたいと、希い訴える。「恋煩い」に悩める程イエスを愛せればいいのという「恋煩い」を〈恋い煩い〉たい「恋煩い」の「希い」が、この作品ではあるまいか。

深い瞑想は鋭い内省に到り、厳しい内省は重厚な瞑想を生む。この一篇に限らずこの詩集の多くの作品からは、既にもう明らかだろうが、語り手の裡深く蠢く不安と、外への、時代と社会への憤りとが、発散しているだろう。

この作品から「三位一体主日」や「復活前主日」（共に「小考（十）」を挟んで九番目に次の作品が現われる。

ヘロディアの娘 The Daughter of Herodias⁽¹⁾

「マタイによる福音書」第十四章第六節以降⁽²⁾

空しい罪深い〈業〉^(わだ)！誰だったのか最初に一致させたのは
汝の猥りがわしい忌み嫌われた〈動作〉を音と、
そして粗野な才人よろしく厳かな〈音楽〉を
誤らせて限界を越えただらしない旋律にしたのは？

どのような火を彼は頭上に載せてきたことか？

その時以来彼の諸々の罪に⁽⁴⁾（せざるを得ないのだが）
彼の〈業〉は尚も（たとえ彼が死んでいるにしろ）

血と欲望について新たに生々しい説明を加えるのだ。

だから放はなつておこう 若い(5)〈女妖術師〉は、〈氷〉が
あの内気な精神を眠(8)らせることだろう、
それが汝に今や彼の眼を楽しませることを教えるのだ
彼は汝の嫌らしい母親を囲(7)っているのだから。

しかし汝は十分に楽しませた、と彼は厳(6)かに宣言する、
しかも汝の罪を、誓(9)つて満足させるのだ と、
彼の恥知らずな欲望は 公の衣服を纏(9)つていながら
汝の艶(9)かしい手管に烈しく屈服するのだ。

〈手練の〉にして生れつきの〈魔女〉！
誰が邪悪から善良を持つて来れようか？
汝の母の網が汝に拈(9)げられていたのだ
彼女が〈近親相姦〉へ誘(9)い、汝が血へと誘(9)うのだ。

[M・五〇三]

訳注

(1) ヘロデ・アンティパス「ヘロデ大王の子、ガリラヤの太
守 (4—39 AD)」の二度目の妻でサロメの母、娘サロメ

を唆(8)かして洗礼者ヨハネの首を太守に所望させた。

(2) 第十一節まで、サロメと洗礼者ヨハネの首切断の物語。

(3) *Ike wilde wit* この箇所への簡潔な鍵はこの詩集の序文
の冒頭にある「近年の概念で〈才人〉と呼ばれる人々」に
対する批判「小考 (四) 20」にある「RA・六一」。

(4) *to his sins* : *blood and lust* 「小考 (四) 23」 「無益な
書物を書く者は死後も生きて罪を犯すことになる」(M・
三九〇・17) 参照「M・七四八」。

(5) *印付きでヴォーンの自注がある、「彼女の名前はサロ
メだった。凍った川を渡る際に氷が彼女の足元で割れて、
その頭を切断した」。次を参照: Don Cameron Allen, 「
ンリー・ヴォーンの氷上のサロメ」 *Philosophical Quarterly*,
XXIII (1944) pp.84–5. Nicephorus Callistus によって語ら
れた物語を記述している「M・七四八」 「RA・六一」。

(6) *his* *印、ヴォーンの自注「Herod Antipas」。

(7) *Who doth thy loathsome mother keep* サロメの母ヘロ
デアは囲われ女であった。「マタイによる福音書」14・3

— 4「ヘロデアは自分の兄弟フィリポの妻ヘロデアのことで
ヨハネを捕え縛り牢に入れていた。ヨハネがヘロデアに、あ
の女と結婚することは法で許されていないと言ったから」

「RA・六一」。

(8) *he swears... with vows* 「マタイによる福音書」5・33
— 34「あなた方も聞いておられるとおり昔の人々は、偽りの誓

いを立てるな、主に誓ったことは必ず果せ、と命じられてきた、しかし私は言っておく、誓いは一切立てるな」〔同右〕。

(9) His shameless lust この行は、ヘロデのヘロデアへの欲情を、次行の「艶かしい手管に」はサロメの踊りへの喜びを指していると思うが、この二行はサロメその人を指していると言うほうが当たっていそうだ。その場合、サロメの踊りをヘロデアが楽しむのは淫らだとヴォーンは考えているのだ〔RA・六一―一二〕。

A B A B の型で押韻する八音節四行詩五連、計二〇行の作品。洗礼者ヨハネ斬首の話聞いたイエスは舟で人里離れた所へ退くが、その後を追ってきた群衆五千人ほどに、パン五箇と魚二匹だけから、十分に食物を与える奇蹟を行ったのだった(「マタイによる福音書」14・13―21)。新約聖書の中でも最も印象深い話の一つに対するヴォーンの反応が興味深い。この詩は、同題の二篇の作品「イエス泣き賜う」AとB〔小考(六六)〕に前後を挟まれている。洗礼者ヨハネの死に、イエスはやはり「泣き賜うた」のだ。この詩の語り手も泣いている。

バイブルの人名が表題に入っている作品はこの詩集では、他に「イサクの結婚」〔小考(四)〕、「マグダラのマリア」〔同〕、「アベルの血」〔小考(六六)〕、「ヤコブの枕と、記念柱」〔小考(五)〕だけである。

この作品の次に二度目の「イエス泣き賜う」〔五B〕と「撰理」〔小考(十二)〕を挟んで「絆」が来る。マリアとの絆が、「救いの助け」であるイエスと我々とを結びつけ、「神」は我らの「味方」となるのだという(マリアへの讃歌)である。マリアを讃えることは即イエス讃美である。イエスの中の我らと我らの中のイエスを永久に結びつける、マリアとの絆は、如何なる生死も断ち切れないものだというのが「撰理」だと、この詩集の語り手は主張したいのだろう。

絆 The Knot^(一)

〈天国〉の輝かしい〈女王〉！ 〈神〉の〈処女〉なる

〈配偶者〉

晴やかな世界の祝福された乙女！

美しかったので御身の家には生命が繋がり

我らには救いの助けが差し出された。

御身は真物の〈恋結び⁽²⁾〉、御身によって

〈神〉は我らの〈味方⁽³⁾〉となり

人間の劣った〈本質〉に

自らので威厳をつけられた。

その〈縁⁽⁴⁾〉による〈連合⁽⁴⁾〉のせいで

我らは彼の肉体へと成長している

彼の手ずからの恩恵に養われて

御手を我らは自らの頭の代りに持つ。

それでそのような〈絆〉をどの腕が敢えて緩め⁽⁵⁾

どのような生とどのような死が切り離せるのだから

うか？

それが彼の中の我らと我らの中の彼とを

結びつけるのだ 永遠に。

[M・五〇六―七]

訳注

- (1) 処女マリアは、「ご機嫌よう、乙女の中でも最も美しい方」で始まる讚美歌五二番の六五行目で「平和の絆」(五二番の二〇行目では「愛の絆」)だと呼び掛けられている[M・七四九][RA・六一四]。
- (2) the true Loves-knot 'a true-love knot' は、真実の愛の象徴として複雑な飾りの形をした二種の結び目(OED)。最初のハイフンを除去することでヴォーンは「真実の」'true'を強調した[RA・六一四]。
- (3) Allie = Ally 「約定によって結びついた」という意と、今は廃れた「親類」の意とをヴォーンは譬喩として使っているようだ[同右]。
- (4) Coalescent = growing together, combining、「成長して一体となる」の意。OEDがこの箇處を引用する。キリスト教徒は教会をキリストの肉体だと見做す、「コリント人への手紙一」10・17「パンは一つだから私たちは大勢でも一つの体です」[同右]。
- (5) And such a Knot :: keeps for ever: この一連への聖書の背景が、この詩と直前の詩「摂理」[小考(十一) 52―53]との地下での関係を示している。
「ローマ人への手紙」8・35―39「誰がキリストの愛から私たちを切り離せようか、艱難か苦しみか迫害か飢えか裸か、危険か剣か、(私たちはあなたのために一日中殺さ

れているのであり屠られる羊だと見做されている」と書かれているとおりです、いや、これら全ての事において私たちは、私たちを愛して下さる方によって征服者を凌ぐ者になつています、私は納得していません、死も命も天使も支配者も権力者も現在のもものも未来のものも、高きにいる者、低きにいる者、他の如何なる被造物も、私たちの主イエス・キリストの中に示される神の愛から私たちを切り離すことは出来ないのです」「R・A・六一四」。

ABABの型で押韻する四連から成る。各行の音節数は、
9 6 8 6 / 8 6 8 6 / 8 6 8 6 / 8 7 8 7 である。

この詩に次の作品が直続する。

装飾 The Ornament

榮えている世間⁽¹⁾がある日私に見せてくれた
豪華な〈市場〉ときらびやかな在庫品を、
そこへは誇らし気に急ぎながら富める人が
買ひに出かけ 貧しい人はやつてきては涎を流した。

彼らは真面目とみえて買ひ上げた 悉く

驕りを満足させ欲望を促す最新の〈流行品⁽²⁾〉を、
尤も最初のものは確実に墮落するに違ひなく
最後のものはこの上なく忌わしい塵になる。

しかしいずれも華やかな、心をそそる衣類を
怠惰な心と忙しい様子で 彼らは注意深く

点検した(怠惰のせい⁽³⁾でそこにあらゆるとりとめの
ない〈記録⁽⁴⁾〉と書物が積み上げられてきたのだから)。

彼ら驕⁽⁵⁾った思い上った面々の縦列の中を

赤面しながら、控え目な衣服⁽⁶⁾を纏⁽⁷⁾って

策略などおよそ知らない銜⁽⁸⁾のない表情をして

やってきたのが 羊飼いのシリアの(乙女⁽⁹⁾)だった。

彼女と直に 耀⁽¹⁰⁾く(一行⁽¹¹⁾)が出くわした

彼女の纏⁽¹²⁾わない表情と衣装に駆り立てられて

そうこうするうち一人が叫んだ、(私たち⁽¹³⁾)は恥しい

彼女はこの上なく美しく装⁽¹⁴⁾っているのに、認めなさいよ。

[M・五〇七]

訳注

- (1) lucky = successful, prosperous 「物質上の繁栄は価値とは関わらない」という含みで」[R・A・六一四]。
- (2) 知られた諺 ‘Pride goeth before a fall’ 「驕れる者は久しからず」は ‘Pride goeth before destruction, and an haughty spirit before a fall’ 「箴言」16・18 「痛手に先立つのは驕り、つまずきに先立つのは高慢な霊」の短縮版。「最初のもの」= 驕り、「最後のもの」= 欲望 [R・A・六一五]。
- (3) pompous file ‘the common file」との類推からのヴォーへの造句。「ありふれた羊飼」の意。(OED file sb) [同右]。
- (4) meek weeds = humble clothing [同右]。
- (5) native = unadorned, simple, unrefined. [同右]。
- (6) the sheep-keeping Syrian Maid = Rachel. ラケル(ヤコブの妻となる)。「創世記」29・9、17参照。「イサクの結婚」[小考(四)]の三〇—四二行目でもレベカが同様の表現で讚美される [M・七四九] [F・三〇三]。
- (7) Row = an array of persons, a company [R・A・六一五]。
- (8) bravest = most finely dressed (OED brave a2) [同右]。

A B A B の型で押韻する八音節詩行(二行目と一六行目

だけ九音節)の四行詩五連総計二〇行の作品。

‘ornament」と言えばすぐに、シェイクスピア作『ヴェニスの商人』のバツサーニオの科白が思い出されよう。

‘The world is still deceived with ornament.’ 「世間はいつも虚飾に欺かれる」(第三幕第二場七三三)。

この作品、途中から不意に「控え目な衣服を纏った」‘meek weeds’、飾り気のない純朴な ‘native’ ラケルが登場し、その「繕わない表情と衣装」‘artless looks and dress’の彼女のような人物が「この上もなく美しく装っている」‘bravest」とみられるようでありたいと訴える。

装飾は虚飾にもなり得るもの、(飾り)に欺かれてはならないという主張の詩とみられるが、「美しく器量よしの’beautiful and well-favoured’」(創世記)29・17) ラケルを持ち出すところが作者の面目躍如たるところである。この詩の次には「マゲダラのマリヤ」[小考(四)]が登場して「美」と「善」の心象が続く。それに「虹」[小考(二)]が直続し、そこから五番目に現れるのが次の作品である。

「ヨハネによる福音書」第一章第三十八、三十九節⁽¹⁾

何と幸せな、密かな泉、
美しい日陰、あるいは山か、

その 見つけられずにいた手つかずの栄光を

この日それは誇りとする、その物語の中ではないが⁽²⁾

では御身の泊る所だったのか？ 何か雲のようなものが

〔幕舎^{テント}〕目掛けて降りてきて覆い隠したのか

我が苦しみ悩む〈主〉を？ それとも星が

御身に招かれて 高く遠くではあるが

火花とばかりに弾け飛ぶ微笑みとなって喜び勇んで下り、

光を内に宿して己れ自らのものを増やしたのか？

我が親しく貴い〈神〉様！ 私には分りません

何がその時御身の宿となったのか⁽³⁾ どこにかどうしてか、

でも確信していません、御身が今や来て下さるのだと

狭い質素な部屋にしばしば

そこでは御身も最小の役割だけは担って下さるのだと、

我が〈神〉様、私の罪深い心を、という意味です。

訳注

(1) 「イエスは振り返り、二人の弟子が従って来るのを見て

何を求めているのか、と言われた。彼らが、ラビ〔先生〕

どこに泊っておられるのかと言うとイエスは、来なさいそ

うすれば分ると言われた、彼らは蹤いてゆき、イエスが泊

つておられる所を見、その日はイエスの許に泊った」。

(2) not in story = not in history 引用されている「福音書」

の中では、イエスの宿所は述べられていない」〔R・A・六

二三〕。「それは誇りとする」の「それ」は、最初の二行の

「泉」「日陰」「山」。

(3) What lodged thee then 「キリストの降臨」〔小考（十

一）35〕の一九—二〇行目「私にあつたらしいのに 私の

最良の部分に／御身にびつたりの〈部屋部屋〉が！」と比

較〔R・A・五六五〕。

住居、とはイエスの宿泊所のこと、それが冒頭の「福

音書」の話の中で明示されていないことに触発されての、

ヴォーンの瞑想である。A A B B C C ∴と二行ずつ対で押

韻する二行連句の一六行詩。音節数は7599と続き五行

日以降は全て八音節。

神は如何なる所に宿られるものかは分らないが、この私の「狭い質素な部屋」にもしばしば訪れては「私の罪深い心」を担って下さるだろうことを——それを神の「最小の役割」と述べるところが、謙虚のようで何か厚かましい感じもするが——語り手は希求する。

これに直続するのが次の詩。

兵士 The Men of War

「ルカによる福音書」第二十三章第十一節⁽¹⁾

誰でも耳ある者には

と、⁽²⁾ 聖ヨハネは言う、聞かせよう。

〈捕らわれ〉へと他人を

導く者は〈捕らわれ人〉になる。

剣で他人を殺す者には

剣がその者の血を同じように流す。

ここに〈聖なる者たち〉の忍耐と

挫けることなき真実の信仰が要る。

御言葉が（親愛なる〈主〉よ！）私の光でなかつたら

どのようにして私は終りなき夜へと走っていった

御身と御身のことを煩わせて〈聖人がた〉⁽⁴⁾の

ために私自身と私のものを実現させればいいのか。

でも今は御身によってこうして蒙を啓かれたので

そのような酷いことは考えなくてもよいし

束の間の己が目的に適ったからといって

巧くいった邪悪事を褒めなくてすむ。

というのも この明るくて教えに富む一節では

御身の〈聖人がた〉は〈征服者たち〉ではなく

忍耐強く温和に圧倒されているのだから

御身同様に、無視されて啞然たる時には。

御身が〈天国〉で率いる軍隊は、⁽⁵⁾ 戦つて

御身に従う際には皆、白衣に身を包むが

ここ地上では（御身には必要なのだが）

軍団は皆無で血を流すことになる。

御身が指揮に用いる剣は

口の中にあり、手にはなく⁽⁶⁾

御身の〈聖人がた〉が圧倒するのは⁽⁷⁾

御身の血と彼らの〈殉教〉の賜物なのだ。

しかし遙か昔 眺めていた〈兵士たち〉は⁽⁸⁾
御身に唾を吐きかけ 身体を打ち叩きさえた、
茨の冠を御身にかぶせ 跪いて
侮辱した、私たちに今も目にみえたとおりに、
私は連中のすることには何ら驚かない、
彼らは私の〈救世主〉をそうして利用したのだから
それ以来彼らは我が〈主〉を思うようにしてきたのだから
僕はそれを悪く思つてはならない。

親愛なるイエス様 私にここで忍耐を与え、
信じさせて下さい 私の〈冠〉は真近にあり
殆ど手が届いているとみえると、確かなのだから
私とその〈魅力〉をしつかり受けとめて無視しているかど
うかは。
お与え下さい私に 謙遜と平穩を、
満足のいく思いを、無害無垢な安らぎを、
爽やかで 執念深くない静穩な心を、
そして私を最も憎む人には 親切を。
お与え下さい私に、我が〈神〉様！ 子供だった頃の
ような穏やかで素朴な心を、

御身の〈玉座〉が据えられて、悉く⁽¹⁰⁾
これら〈征服者たち〉がその前に倒れる時
私が見い出されるように(御身に保護されて)
あの選ばれた一団の中に、
彼らは(ここでの) 血によってではなく
祝福された〈子羊〉⁽¹¹⁾の血で打ち勝つたのだ。

〔M・五一六—一八〕

訳注

(1) 「ヘロデも自分の兵士たちと共にイエスを侮辱し嘲つた
挙句、派手な衣を着せてピラトに送り返した」。第九節
「それで色々尋問したが、イエスは何もお答えにならな
かつた」も当て嵌る「F・三二六」。

(2) 一六五五年版には*印付きで、「ヨハネの黙示録」第十
三章第十節、とヴォーンの自注がある。

冒頭の八行は次の第九・第十節をヴォーンが言い換えた
もの、「耳ある者には聞かせよう、捕らわれに到る者は捕
らわれてゆく、剣で殺す者は剣で殺されねばならぬ、ここ
に聖なる者たちの忍耐と信仰が要る」〔RA・六二四〕。

いちいち「他人」others、をと言ひ、「血を同じように流
す」his blood likewise spill、と「挫けぬことなす」which

never faints」真実の「true」を入れてヴォーンは、バイブルを言わば添削している。

- (3) 次行との間にF版は一行開けているがRA版と本定本版は直結。

- (4) Saints 「マグダラのマリア」の七一―七二行目(最終二行)「小考(四) 16」「彼「シモン」は依然としてライを病んでおり、その事が活写するのだ/自らを〈聖人と看做す〉人々、彼らは〈聖人〉ではない」とその注を見よ「RA・六二四」。

清教徒たちが「聖なる人々」と自称すること程ヴォーンに衝撃を与え怒りを覚えさせたものはなかったようだ。彼は信仰の篤さを示す文脈で怒りを噴出させ、創作の期間を通じて、彼が到達する心理の均衡がどれ程あやふやなものかを示している。散文作品『オリヴ山』にも、見せかけの神性さへの非難が散見する。例えば、「神性だと詐称する偽善者党派主義者」[M・一八〇]、「もし我々がこれら〈諸聖人〉の輝く熱意溢れる敬虔さと我々の時代の錯覚を招くけばばしい見かけのそれと較べるなら…」[M・一八一]、「我々が精緻に、悪意、圧迫、淫らな見解、様々な欲情の只中に入り込むと、〈霊〉に頻りに言及し、厚かましくも我々自身も〈諸聖人〉の様式を帯びているなど口に出す神性さの見かけが…」[M・一八二]など「RA・六一八」。

- (5) Armies thou hast...all cloth'd in white 「ヨハネの黙示録」19・14「天の軍勢が白馬に乗り白く清い上等の麻布を纏ってこの方に従っていた」及び「同」12・7「天で戦いが起った、ミカエルとその使いたちが竜に戦いを挑んだのだ」[RA・六二四]。

- (6) in thy mouth, not in thy hand 「ヨハネの黙示録」19・15「彼の口からは鋭い剣が出ていたが、それで諸国の民を打ち倒すためだった」；「同」19・21「残りの者たちは馬に乗っている方の口から突き出ている剣で殺され…」[F・三二六]。

- (7) all thy Saints...their Martyrdom 「ヨハネの黙示録」12・11「兄弟たちは子羊の血と自分たちの証しの言葉で彼「サタン」に打ち勝った、彼らは死に到るまで生命を惜しまなかった」[RA・六二四]。

- (8) But seeing Soldiers...bow'd the knee 「マタイによる福音書」27・29―30「彼らは茨で冠を編んで彼の頭に乘せ、右手には一本の葦を持たせて、その前に跪き、ユダヤ人の王、万歳と言って侮辱した。更に唾を吐きかけ葦を取って頭を叩いた」[同右]。

- (9) innoxious = (1) harmless, (2) innocent 「同右」。拙訳はこれに従ってこの形容詞一語を「無害無垢な」とした。

- (10) っごからの四行「That when thy Throne...chosen company」[ヨハネの黙示録」3・21「勝利を得る者に私は自

分の王座に共に座らせよう、私が勝利を収めて私の父と共にその王座に着いた時同様に」〔RA・六二四〕。

(11) 訳注(7) 参照〔F・三二七〕

冒頭行が六音節、二一行目 'Armies thou hast in Heaven, which fight, が九音節以外は全て八音節の詩行が二行連句 (A A B B …と対で二行ずつ押韻する) で計五二行の作品。

聖書に言及される戦闘に、そして、イエスの処刑に関わった兵士たちに思いを及ぼした腹想の作品だが、ヴォーンは清教徒革命の内乱時に、王党派に与して一兵士として清教徒軍と戦った経験があるようなので「H・八九」〔小考(一) 15〕、それが重なっているだろう。

ここから十番目に次の作品が収録されている。「ヤコブの枕と、記念柱」〔小考(五)〕と二度目の「最後の審判」〔B〕〔小考(六)〕に挟まれて。

契約 The Agreement

私がそれを書き記した。しかし その
〈記録〉を見て羨んだ人が 爾来

濃霧を私の心に棚引かせたので

それはあの目論まれていた閃光を全く忘れてしまった。

私はそれをしばしば悲しい思いで読んだが それでも

単純に信じたのだ、それは私の〈鴛ペン〉ではないと、

遂に 私の生涯の親切な〈御使い〉が訪ねてきて

明るく忙しく羽搏いて

あの雲を撒き散らしながら 私に炎を示したが

それは途切れることなく〈明けの明星〉のように歌い

輝いて、私にとある場所を指し示してくれた、

一年中〈太陽〉の顔が見える所だった。

おお 光輝く書物！ おお 我が真昼よ

恐怖の数々と夜を 根絶やしにしてくれる！

あの山よ、その白い〈峰々〉は

真物の光と結びついていよう！

私の思いは、そなたの方へ動いてゆく時

そなたの愛で光りきらめき燃え上るのだ。

そなたは油でワイン酒場、

そなたのはすぐ間に合う癒しの木の葉で
生命の木から私たちへと吹かれてきたが

私の死んだ心が波立たせる彼の呼吸によつてであつた。

そなたのもののどのページにも真物の生命が在り

〈神〉の明るい心が印刷されて表れていた。

大方の現代の書物は そなたについた染みであり

それらの原理は粉殻で 風に吹かれる衣服、

その筆者たち同様ずっと黒ずんでいるのだ、

書かれた時に、あの酷い暴風雨のせいで、

その間 そなたを人間の熱意が解説しては唯

混ぜ合わせるのだ 自己崇拜と身勝手な目的とを。

そなたは忠実な、真珠の輝く岩であり、

きらきらきらめく活発な光の〈蜂の巣〉、

いつも元のまま、その行き渡つた評判が

全く静かなまま、暗さ極まる夜な夜なを掃り減らす。

そなたの視線は光線で、真物の〈太陽〉が噴き出す、

そなたの木の葉は 彼が拡げる癒しの翼。

というのも そなたが私を慰めてくれるまで

私には貧しい言葉一つ言えなかつたのだから、

分厚い忙しい雲が増えて

言つた、私は昼日中の子供ではないと、

彼らは言つた、私自身の手が移したのだよ

上から私に与えられたあの蠟燭を と。

おお〈神〉様！ 私は弁えて確かに告白します

私の罪は大きく 今尚幅を利かせています

この上なく忌まわしい罪で 数えることもできません！

でも 御身の〈哀れみの念い〉は挫けたりしません。

もし御身の確かな慈悲の心が妨げられるなら

全ては予測どおりだ、と私の敵共が語つてきました。

しかしその間も時間は経過し、そしてその後は

永遠となり 決して終ることはない、

全くまだ無限にあるその両方のお陰で

御身の〈契約〉はキリストによつて拡がるのだ、

脆さの罪も若さの罪も

彼の価値と御身の真実を損なえないのだ。

そしてこのことに私は時々刻々気付いてゆく、何故なら

御身はやはり再生させ浄化し、癒すのだから、

御身の配慮と愛は一緒になって

新しい（強壯劑）と新しい（下劑）を分け与える。

しかしもしも私が一たび御身に見棄てられたら

私には分るのです（我が〈神〉様！）こんなことには
なるまいと。

そういう訳で涙（御身によって送られた涙）ながらの

お願いです、私の信仰が決して衰えませぬように！

そして死の際に私の話す力が尽きたら

おお その時はあの沈黙を行渡らせて下さい！

おお あの冷たい平静「冷えた熱」を保ちながら私
の敵を追跡して

我が心臓の最後の内輪の苦痛を聞いて下さい！

それで御身は、その仕事を始められたのだから

（私は引き寄せられるまで御身の許へは行けなかったので）
それを終えられるでしょう、そして罪によって

御身の惜しみない慈悲が妨げられたりはしないでしょう。

それに対して、おお 〈神〉様、私は唯

御身に感謝し、恩知らずな人を責められるだけです。

〔M・五二八―三〇〕

訳注

(1) one that saw/And envyed おそらくサタン〔RA・六三四〕。

(2) like Morning-stars did sing 「モブ記」38・7「その時夜明けの星々はこぞって歌い、神の子らは皆喜びの叫びを挙げた」〔同右〕。

(3) Ascendens OED には 'ascendant 「周辺一帯より突出しているもの、山頂、あるいは峰」に、「一六五〇年」と誤って「この詩は第二部（一六五五年）」この簡処が引用されている。ヴォーンはこの意味と共に「上昇してゆく人、出世する人」(OED ⑥)の意味も含めた地口を実践していると思う。次行の「結びついで」[in] conjunction [with] も占星術の意味「合＝二つ（以上）の天体が同じ黄経上にある状態」が地口になっていそうだ〔同右〕。

(4) Heaves 「動かす、何かの感情を高める」(OED heave v ⑤)。この行の意味は「この詩人の心の死んだ状態はキリストに苦痛を与える」〔同右〕。

- (5) Most modern books are blots on thee ウォーンの後の詩集「甦ったタレイア」(一六七八)所収の「世界」『The World』[M・六六九―七一]の八三―八五行目「御身が着飾りさせたような／御身の貴重な言葉だ／〈才人〉や墮落した趣味人が害毒を与えてきたようにはなく」と比較「同右」。
- (6) those foul storms 清教徒革命の嵐を指すのだろう。
- (7) the mans zeal の the は OED によっても一七世紀の 'thee' の綴りであるのは殆ど確かなので、(7)は 'thee' と校訂する。'thee' は一三行目以来「そなた」と呼び掛けられている(「光輝く書物」)バイブルを指す [RA・六三四]。
- (8) zeal 同じような軽蔑的な使い方としては「星座」[小考(七)23]の四〇行目「泣き叫びながら熱心に」と「甦ったタレイア」所収の「変装王」『The King Disguised』[M・六二五]の三二行目「熱意」を燃やして炭にした」を見よ「同右」。
- (9) lays out = expounds 「詳しく述べる。『教典などを』説明、解説する」。この第五連の感情については「最後の審判」[B][小考(六)20]の三五―六行目「不信心な才智と能力で〈聖書〉に／こり押しされる改竄も」を参照 [RA・六三五]。
- (10) self-ends = selfish aims or purposes (OED) 「同」。
- (11) Thy lines..he spreads 「夜」[小考(七)36]の一〇行目「御身が立ち上がった時に」の注(3)——「マラキ書」4・2「…翼に癒す力を備えた正義の太陽が昇る」を参照 [F・三三三]。
- (12) That candle ..from above 「鶏鳴」[小考(八)32]の一―行目「彼らの蠟燭がどれほど燃やされたにしろ」参照 [RA・六三五]。
- (13) cold calm 斜字体で作者は、学識者にしかそれと認識できそうにないある逆説に注意を促しているのだろう、即ちウォーンは、'calm'に後期ラテン語「紀元一七五―一六〇〇頃」の *calma* = 'heat' を連想しているのかも知れない。それを「ウルガタ」の「ヨブ記」30・30「骨は熱 *calumate* に焼けただれている」から知ったものか「同右」。
- (14) 一六五五年版に*印で「ヨハネによる福音書」第六章第四十四節、第六十五節、と自注。「私をお遣わしになった父が引き寄せて下さらなければ誰も私の許に来ることは出来ない。私はその人を終わりの日に復活させる」「それで彼は言われた、そういうわけで私はあなたの方に私の父からの許しがなければ誰も私の許には来れない、と言ったのだ」

八音節の詩行が A B A B C C の型で押韻する六行詩一二

連計七二行の作品。

「私」は自らの信仰がともすれば衰えようとするのを感じ取っては、その強化、保持を希い続け、〈契約〉で確かめておきたいと思うのである。この、聖書とキリストへの瞑想から三番目に、「詩篇 六五」の次に「玉座」が現れる。

「玉座」[御座] 'throne' はこの詩集では、この作品も含めて先刻の「兵士」、「虹」[小考(二)]、「イエス泣き賜う(五B)」、「小考(六)」、「記一」[Thou that know...]、「小考(九)」、「記四」[Silence, and...]、「同上」、「悲惨」[小考(八)]、「引退」[同上]、「悔い改め」[同上]、及び、複数形で「種子密かに成長して」[小考(九)]の計十回現れる。西欧の絵画では、〈空の御座〉^{から} 凶像というのが知られているが、神は目に見えない存在なので、玉座だけで神の姿を表すのである。詩作品においても「玉座」とは〈神〉そのものでもある。

玉座 The Throne

「ヨハネの黙示録」第二十章第十一節⁽¹⁾

この両眼は御身によって閉ざされていたのが
その後回復したので

それで私は見るのです あゝ畏怖してやまない〈主〉の

大きな白い玉座を、

そして低く跪きながら⁽²⁾ (大抵硬直して

いたので跪かねばならない)

彼を見つめるのです 高い犠牲を払って下さったので

(目には見えないが⁽⁴⁾ あれ程までの喜びを私は感じ

るのです。

どれ程の議論や技術を

賢い頭という頭が用いても

私は涙ばかり流し やはり

赤面するのです。

そしてもしあの しばしば勝利を取ってきた

言葉なき物乞いたちが敗れるのなら

御身に教えられて⁽⁵⁾ 私は幅を利かせて

言いましょう、御心は行われたり!⁽⁶⁾と。

「M・五三三」

訳注

(1) 「私はまた大きな白い玉座と、そこに座っておられる方とを見た。そのお顔から天と地とは逃げて行って行方知れずになった」。最後の裁きの場面である。

(2) *And lowly kneeling.. must kneel* 「身仕度」〔小考(十一) 42〕の三七—四二行目「ある者は御身に向かつて座り食べます／御身の体を、自分たちに〈共通の〉食物として」は清教徒の改革者たちの主張。しかし「私」は、四〇行目「哀れな塵は相変らず身を低くすべきもの」と考え、四一行目「跪いてお辞儀をします」、以上と比較せよ「M・七五」。

(3) *high cost* キリストの十字架上での死 (the Crucifixion) に言及「RA・六三六」。

(4) *Unseen* この詩の直前の作品「詩篇六五」〔小考(十二)〕の三七行目に「全ては見えないまま」とある。この詩集には「(眼に) 見えなく」*unseen* は一三回使われ「T・二一九」「見えない」事・物の重要さが示唆される。

(5) *taught by thee* 「マタイによる福音書」6・9「だからこのように祈りなさい」と言った後すぐに「主の祈り」*“Lord’s Prayer”* が始まる「RA・六三六」。

(6) *Thy will be done!* この「主の祈り」からの言葉は、ゲッセマネ (Garden) での苦痛の間中「マタイによる福音

書」26・42) キリストが何度も口にする「同右」

ABABCDCDの型の押韻の八行二連で、音節数は二連共一行目から順に8484848486。

この作品の次に「死」(B)「小考(六)」を挟んで次の長篇がくる。

祝祭 The Feast

おお 来てほしいものだ

一刻の猶予もなく、⁽¹⁾

さあ 私の心が清浄で安定しているうちに！ ⑨

〈信仰〉と〈恩寵〉が
その場所を飾って

塵と灰とに身がまえさせている間に。

ここで与えられた至福は

永遠のものではない、

そのような勝利になど貧しい肉体は値いしない、⑨
僅かばかり味ったり一瞥しただけでも

喜びは高価なものになる、

更にもっと多くを求める人が、受け継ぐだろう。(2) ⑨

だから来てくれ 真物のパンよ(3)

死者を活気づけながら、

それを口にする者は死なない、死ねないのだから、

来てくれ 私に先

立って哀れな塵に勝

利をもたらずあの状況よ。

ああ(4) 勝利だ

御身の眼から 一日が

東方から始まるようにぱっと現れる、

零れた露が

涙のように 泣いて

解放された悲しい世界を見せてくれた時に。

噴き上がれ、おお 葡萄酒よ、

噴き出しながら輝いてくれ

彼の心からの何か喜ばしい伝言と共に、

彼が 殺害された時に

定めたのだと、こういった諸諸(もろもろ)の

私が彼の中で一役を担う 方法を。

彼の祝福された心の中の(5)

確かな一部である

あの井戸、そこでは滔々と水が湧き出していて、

それで養われるので

哀れな塵は死んでいても

再び起き上がり 生きて歌うのだ。

おお 飲み物とパンよ

死を打ちのめして死なせる

あの(ヴェール(6))人間なる不滅の生き物の糧(フレッド)！ ⑨

ここでの覆い(ヴェール(6))の下で

御身は私の活気(もと)の源

確かな存在、我が眼には見えないままに。(7) ⑨

どのようなにして御身は飛んでゆき

探索し窺きみるのか

私の隅々を、そして素早い

物知りの灯火のように

探し出すのか 私を悲しませたり

不快にする影を伴う邪魔物を一つ一つ？

おお 何と高らかな喜びを

その〈キジバト〉の⁽⁸⁾声と

歌を 私は聞くことか！ おお我が〈主〉の ⑨

血の驟雨を掻き立てて

君は岩々を芽ぐませ

乾いた丘陵に井戸と花々を^{いた}戴かせることか！ ⑨

こういう真物の安息を得んものと

この癒しの力ある平穩が

潑漑たる栄光をこうして味わいたくて

私の魂と全てが

跪き伏して

彼の悲しい勝利の物語を歌うのだ。

⑩

おお 綿毛より柔らかい⁽⁹⁾

棘立った冠よ！

おお 苦痛の〈十字架〉、我が安らぎの寢床！

おお 道を拓く

槍よ、鍵よ！

おお 御身の最悪状態、我が唯一の最善！

おお！ 御身の悲嘆全ては

これ皆我が安堵、

そして我が罪の悉くだった 御身の悲しみとは！

だから何が私に出来るでしょう

これに応えて、

音もなく流す涙以外に（おお〈神〉様！）何が？

富が流れ出すようにと

骨折って種子を播き、

この大地を翌年の食物のために飾る者がいる、

だが 私に注意させて欲しい、

何故御身は血を流されたのか、

そして次の世では何を食べればいいのかと。

「ヨハネの黙示録」第十九章第九節⁽¹⁰⁾
 幸いだ、**子羊**の結婚の**晩餐**に招かれてゐる者は！

[M・五三四—三六]

訳注

- (1) come away / Make no delay G・ハーバート「最後の審判の日」『Dooms-day』[六行詩五連計三〇行の詩、Wi L・六四九—一五三]の「二行目と全く同じ」[M・七五一]。
- (2) Who seeks...inherit = prematurely 「時期尚早に」[M・七五二]。この示唆は疑いなく正しい[R A・六三七]。
- (3) true bread 「ヨハネによる福音書」6・32—33「するとイエスは言われた、はつきり言っておく、モーセが天からのパンをあなた方に与えたのではなく私の父が天からの真物のパンをお与えになる。神のパンは天から降ってきて世に命を与えるものだから」[R A・六三七]。
- (4) I = Av [F・三四〇]。
- (5) この一連六行については「悔い改め」[小考(八) 54]の五五—五六行目「それぞれそれぞれの流れの中にあるものにお与え下さい／我が(救世主)の心の中に水源がある一歩を」とその訳注(8)を参照[M・七三九]。
- (6) Under weys here St Thomas Aquinas, *Adoro te*, l. 25.

「イエス、私が今覆いの下で見ている方」と比較[M・七五一][R A・六三七]。

(7) Present and sure without my seeing 同じく右のトマス・アクィナスの *Pange lingua*, 29-30. 「信仰は、五感に欠けているものを進んで与える」と比較せよ「同」。

(8) The Turtles voice 「雅歌」2・12 「花々は地に咲き出で小鳥の歌う時が来た、我らが里にキジバトの声が聞こえる」[R A・六三七]。

(9) ところからの九行 'thorny crown...thy sorrows were」

G・ハーバート「感謝祭」『The Thanksgiving』[五〇行の詩、Wi L・一一—一五]の「三—四行目」御身の一撃は私を撫でることになるのか？ 棘は、私の花？／御身の答は、私の花束？ 十字架、私の亭？」と比較[M・七五一]。

(10) 欽定訳[F・三四二]。因にジュネーヴ版[GB]には「結婚の」がない。しかし欄外注に「これは夫が結婚のために与える贈り物で、キリストが配偶者に与えるように私たちに与える最も厳選した飾りである」とある。

各連共AABCBBの型で押韻する四音節と八音節(九音節詩行—拙訳行末に⑨と付記した—七行と、十音節詩行—同⑩—一行が混入)の詩行から成る六行詩—三連、計七

八行の長詩。この作品も未考察のまま今は少し先を急ごう。

この詩から三番目に、そして最後の「反歌」「小考」(四)まで五番目の位置に次の作品が現れる。

機敏 Quickness

偽りの生命！ 幻影(1)にしてそれ以上のものではない、何時

汝は去つてしまふのか？

汝あらゆる人間の中でも 真実を

実現させようとしてこなかった邪悪な偽者は。

汝は〈月〉のような苦勞人、盲目で

己をまごつかせる威厳、

波ウェイブスと 風ウィンドとの 暗い競い合い、

単なる嵐のような闘争。

生命とは確固たる、洞察力に富む光であり

物分りのよい〈喜び〉、

偶然のものでも調節したものでないがいつも輝いていて

穏やかで満ち足りているが、飽きさせもしない。

実は 大変幸せな事柄なのだ、やはり、

確かに活気づけ

輝き、微笑み、〈永遠〉ではなくても

喜ばせる技巧を備えているというのは。

汝は骨折りを惜しまぬ〈土竜〉、それ程まででなければ

動き続ける霧

しかし生命とは、誰にも表現できないもので、

機敏さであり、私の〈神〉が口付けしたものだ。

[M・五三八]

訳注

(1) foil 適切な意味として、互いに排除し合わない三通り

が可能である。(二)、「反映」の意の foil の譬喩用法から

生ずる、(真物の生命の) 似姿、幻影 (OED foil sb.4b)。

(二)、貴金属の見かけを与えるために何か透き通った実質

の下に置かれた何かの金属の薄片、箔。(三)、敗北、挫折

(OED foil sb.2) [RA・六三九—四〇]。

(2) Moon-like = inconstant 「移り気の」「気まぐれの」 [R

A・六四〇]。

(3) Thou 一行目の「偽りの生命」‘False life’「同右」。この「生命」は「生命を持った人」の意だろう。

(4) *A quickness, which my God hath kist.* この「機敏」とは「生命(力)‘life’であり、「活気[力]‘vitality’の意。このイタリックスが引用か反響を表すにしろ出典未詳。要約の見事な簡潔さが人目を惹きそうだ[R・A・六四〇]」。

各連とも二行目が四音節、あとは八音節、どの連も一行目と三行目、二行目と四行目が押韻するA B A Bの型。

人間は偽りの生命を生きてはならず、真実を実現させるべく「神に口付け」された「機敏さ」そのものである真物の生命を生きるべきだという主張であろう。

〈土竜〉が譬喩に持ち出されるのは、この詩集ではもう一度だけ、ヴォーンンの詩の中でも最も有名なものの一篇「世界」〔小考(二) 62〕の二三行目で、オリヴァー・クロムウェルかとも目される政治家の政策を「土の下で精を出す」土竜が掘り進むのに似ている、と使われていた。

土竜は、「盲目」「強欲」「勤勉」「誇りと野心」などの象徴でもある「*de v*・三三二四—二五」。

*

以上、今回の十篇の作品で、ヘンリー・ヴォーンンの代表作『火花散る燧石』の第一部七三篇と第二部五六篇の総計一二九篇、及び「序文」「献詩一、二」共々この詩集全ての、筆者による試訳が完了した。本誌「成城文藝」第一九九号「二〇〇七年六月」以降この第二一一号まで十三回の連載であった。これまで毎回、その都度、独立した主題が浮上した筈である(そのために毎回、「参考文献」を付した)。言わば「群盲象を撫でる」の図の実践のようであった。象の姿を手探りで捉えようとする視覚障害者——だが、その分大きく開いた強力な〈心の眼〉を備えており、他の感覚が特別鋭敏であることが多い——の有様が示されたと見えよう。

ある者は象の鼻を撫でて、象とは太い縄のような動物だと言ひ、ある者はその腹部を触つて象とは厚い壁を思わず生物だと述べ、ある者は足をまさぐつて太い柱に似た生き物だと主張し、またある者は四本柱で支えられた吹きさらしの小屋のようだと申し立てた云々、という状態だったとも言えようか。いずれも象の一部を表しているという意味でそれぞれ事実であり嘘ではない。しかしいずれも象そのものではない故、象の実際の姿からは遠い。が、それら

は、肉眼では及べない〈心眼〉による洞察がその都度、象の真相をちらちら垣間みせてもいるのである。確かに象は、太い強力な縄の働きも示せば、分厚い壁の機能を果す場合もある。がっしりと頑丈な柱の作用も出来るし、吹き曝しではあっても暖かな小屋の役割を演じられもするであろう。

本小考(一)——(十三)は、英国十七世紀の巨象の一端である『火花散る燧石』なる詩集の全体像を捉えるための、生の各部分、原資料を、一まず全て提示し得たことになったであろうか。これに基づいての筆者のこの詩集の全体像把握(部分的には先走りの形でその方向を幾度か示唆はしたつもりだが)、及び、稿を改めようと未考祭のままにした作品の評釈や解説——本稿では「祝祭」など——には、今しばらく時間を貸していただきたいと切望する。

尚、本小考(一)発表後間もなく、友人から左記の著作吉中孝志『ヘンリー・ヴォーン詩集——光と平安を求めて』(広島大学出版局、二〇〇六)の存在を知らされた。そこでこれ幸いと最大の敬意の表し方としてその先行書を、本小考の完了まで一切参照しない決心をして(といいつく)念を押すまでもないが、無視ではない。現に作業を進め

ながら折り折りその存在を意識した)その実行に徹して今日に到った。改めて申すまでもないが、全く独立した別箇の日本人の仕事が複数存在することは、その異同の種々相によって、同朋の、ヘンリー・ヴォーン享受にそれだけ利するところが増すだろうという自明の理由からである。自らの「ヴォーン全体像把握」を終えるまで、筆者がこの方針を貫くことは、ご諒解いただけるであろう。

本小考連載を許し支えて下さった全ての方々々に心より深謝申し上げる。

*参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1972.

[BE] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan: Characteristics and Intimations*. London: Cobden Sanderson, 1927; rpt. New York, 1969.

[BEI] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*.

Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.

111—114°

- [㊦] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st. ed. 1929.
- [㊦] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.
- [㊦・㊦] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [㊦] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [㊦] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Student*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [㊦] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㊦] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [岩崎宗治訳『曖味の七つの型』(研究社 一九七四) 三]
- [㊦] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㊦] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㊦] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㊦] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.
- [㊦] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [㊦] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [㊦] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [㊦] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.

- [ㄱ ㄷ] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [ㄱ ㄷ] Hodges, Karen Lee, *The Hawk and the Flint: The Language and Structure of Henry Vaughan's Poetry*. Diss. The University of Arkansas, 1978. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [ㄱ ㄷ] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [ㄱ] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [ㄱ ㄷ] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [ㄱ ㄷ] Lemonedes, Joyce Elaine, "A Gracious Art": *Nature in the Poetry of Henry Vaughan*. Diss. State University of New York at Stony Brook. August, 1976. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [ㄴ] Martin, I. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 木下幸三訳。
- [ㄴ -] Martin, I. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [ㄴ ㅁ] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [ㄴ ㅁ] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [ㄴ ㅁ -] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [ㄴ ㅁ :=] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962. 1st ed. 1954.
- [ㄴ] Nelson, Holly Faith Josephine. *The Scriptural Texture of Henry Vaughan's "Silex Scintillans": The Poetics, Politics and Theology of Intertextuality*. Diss. Simon Fraser University. April 2000. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [ㄷ] Petter, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of*

- Vaughan's "Silex Scintillans". Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [㉔] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [㉕] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.
- [㉖] Richardson, Judith Elaine, *The Retreat to Nature and the Call of the World: A Study of the Conflicts in Henry Vaughan's Poetry*. Diss. University of California, Los Angeles, 1975. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [㉗] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [㉘] Strong, James. *The Exhaustive Concordance of The Bible: Showing Every Word of the Common English Version of the Canonical Books, and Every Occurrence of Each Word in Regular Order; Together with a Comparative Concordance of the Authorized and Revised Versions, including the American Variations*. New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1894; rpt. 1926.
- [㉙] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. [ロトナヰ・シドニー・講義] 『ト・ス・ホロキミンクレーン講義』村田俊一訳(松柏社 二〇〇一)。
- [㉚] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [一] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press: 1947; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [一―] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.
- [二] Whittier, John Greenleaf, *Anti-Slavery Poems: Songs of Labor and Reform*. London: Macmillan and Co., 1889.
- [三] Williamson, George. *The Donne Tradition: A Study*

in English Poetry from Donne to the Death of Cowley. New York: The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.

[W G 1] Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London: Thames and Hudson, 1968.

[W H] White, Helen C. *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience*. New York, 1936. rpt. New York: Collier Books, 1966.

[W 1] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

[W 2] Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam · London: North-Holland Publishing Co., 1974.

[荒川] 荒川光男「黙想詩「夜」を読む」(『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九〇。一八一—一九七)

[川崎1]「ハンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四—一九八)

[川崎2] 川崎寿彦『鏡のマニエリスムールネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二—一五八。

[松崎] 松崎毅「ルーパート王子と「鷺」——ハンリー・ヴォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考——」(『十七世紀と英国文化』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。一七二—一九二)

[P I] 大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物篇』新装版、八坂書房、二〇〇九。

[P II] 大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物薬剂篇』新装版、八坂書房、二〇〇九。

バイブル

[A V] Authorised Version (of the Bible). 別称 King James Version. 欽定訳聖書。The Holy Bible containing the Old and New Testaments Translated out of the Original Tongues and with the former Translations diligently compared and revised by His Majesty's special command, AD. 1611. Appointed to be read in Churches. (London: The British and Foreign Bible Society).

[GB] The Geneva Bible: The Annotated New Testament 1602 Edition. Ed. by Gerald T. Sheppard, with Introductory Essays (New York: The Pilgrim Press,

1989).

[Nub] The New English Bible with the Apocrypha.
(Oxford University Press Cambridge University
Press, 1970).

『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』(東京・日本聖書
協会 一九八九年)

尚、本「ヘンリー・ヴォーン小考」でのバイブルは、
勿論ヴォーンが知らないものなのでこの新共同訳では
なく、それを参照しながらではあるが、権威ある英訳
標準版「AV」の、なるべく忠実な拙訳である。

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそ
のページを表示。

〔小考(一)〕「アスク川の白鳥——ヘンリー・ヴォーン小
考」『成城文藝』第一九九号、1—24、二〇〇七年六月。

〔小考(二)〕「その瞑想を追い始める——ヘンリー・ヴ
ォーン小考(二)」『同』第二〇〇号、47—67、二〇〇七
年九月。

〔小考(三)〕「〈死〉からの再出発——ヘンリー・ヴォーン
小考(三)」『同』第二〇一号、13—33、二〇〇七年十二

月。

〔小考(四)〕「序文」と「反歌」に包まれて——ヘン
リー・ヴォーン小考(四)」『同』第二〇二号、1—32、
二〇〇八年三月。

〔小考(五)〕「複眼による並置比較思考——ヘンリー・ヴ
ォーン小考(五)」『同』第二〇三号、1—27、二〇〇八
年六月。

〔小考(六)〕「追求は異なる角度、視点から——ヘン
リー・ヴォーン小考(六)」『同』第二〇四号、15—42、
二〇〇八年九月。

〔小考(七)〕「花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて——ヘ
ンリー・ヴォーン小考(七)」『同』第二〇五号、13—43、
二〇〇八年十二月。

〔小考(八)〕「隠された宝」へ向かって——ヘンリー・ヴ
ォーン小考(八)」『同』第二〇六号、17—66、二〇〇九
年三月。

〔小考(九)〕「哀歌に託す自己励起——ヘンリー・ヴォ
ーン小考(九)」『同』第二〇七号、1—33、二〇〇九年六
月。

〔小考(十)〕「昇天と復活への思い——ヘンリー・ヴォ

ン小考(十)「同」第二〇八号、1—28、二〇〇九年九月。

〔小考(十二)〕「独立と連合と——ヘンリー・ヴォーン小

考(十二)」「同」第二〇九号、29—59、二〇〇九年十二月。

〔小考(十二)〕「高潔な正義を求めて——ヘンリー・ヴ

ォーン小考(十二)」「同」第二一〇号、16—55、二〇〇九年三月。

拙訳での(へ)付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。固有名詞は原詩では全て大文字で始まるイタリック体なので拙訳では(へ)無しのナミ字体にする。

*本小稿(二)——(十三)は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果である。

正誤表

本小考のこれまでの、参照「考」文献(今回のものを最終版とする)以外の部分の正誤表を付す。その多くを、須山静夫明治大

学名誉教授、工藤力男元成城大学文芸学部教授、及び、加藤真吾大阪商業大学准教授の、親切な教示に依る。

小考 頁段行

(一) 2上19 先立つて↓達

7下18 聴↓聞

8上1 大古↓太古

8下2 小立ち↓木

10下5 給士↓仕

15下18 逢↓遭

21上20 伏↓附

(二) 61下17 全一二九篇のうちに十篇↓九

64下16 「変人」↓「探求」

(三) 18上20 素直に我が春を↓素直に感じ取った 我が春を

18下1 段階と認めて示すのだ↓舞台で見世物だと

22下18 与える力を吹き込むと↓次行に上から6字あけて、

この一行が増える

28上13 感銘深い苦悩の数々が↓次行に、この一行が増え

る

(四) 1上8 を嘉して↓が嘉されて

4下13 「M・四八〇」↓四〇八

14下10 付く↓着

26下6 7 たまえ↓へ

26下10 13 我は言ひたり↓我言ひたり

26下14 相いまみゆる↓相まみゆる

26下19 下さる↓賜ふ

27上1 17 下さりつ↓賜ひ

27上9 者たち↓ども

27上17 解↓解き

(六) 21下11 貧しい↓哀れにも

28上3 we↓us

36上14 (2) crum→crums

37下18 A B A B型の二行連句↓A A B B型とA B B A型

の二行連句

(七) 39上17 同一して↓同一視して

39下2 開く花と↓開く花だと

(八) 29上5 瞬きするのを↓瞬くことを

37下17 「ローマ人への手紙」第八章第十九節↓ゴチック

体に

48下12 40 「私が父に…」↓45

(九) 10下8 境界線内で「↓園の範囲内で」 「小考」(十) 34

12下9 (以下計八回出てくる全ての) 汝↓御身

16上20 「払暁当直」↓「朝の見張り」

21上11 明示される↓て

(十一) 34上22 〈役立たず〉↓「役立たず」

47上15 男↓人間

(十二) 24下20 「似た」者同志↓どうし

30下1 お仰せ↓仰せ

32下6 群象↓群衆

41上22 「列王紀」上↓「列王紀上」

43上3 5 〈小羊〉↓子、尚 本小考での全ての小羊↓

子

ヴォーシンの作品の標題のナミ字体のものは全て↓ゴチック体

(二〇一〇・三・一〇)